様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年３月３０日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：20520625
研究課題名（和文）「日書」よりみた地域文化と中国文明

研究課題名（英文）
Area Culture and Chinese Civilization as seen in Rishu

研究代表者
工藤　元男（KUDO MOTOO）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：60225167

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：中国文明・史料学・考古学・民俗学・宗教儀礼研究

１．研究計画の概要

（１）「日書」研究を通じて、戦国楚において一地域文化として発生した「日書」が、秦による楚の征服を通じて秦に受け継がれ、さらにその秦を倒した前漢にも受け継がれ、その占卜文化は漢の広範な地域に広がってゆく過程を、中国文明との関わりにおいて明らかにする。

（２）それと同時に、秦漢帝国の成立は先秦諸国の地域文化を消滅させていったにもかかわらず、それらの地域文化を吸収してそれを全国的な文化として再編・展開させていった側面との関わりで、占卜文化の拡大の局面についても明らかにする。

これを要するに、秦漢帝国と地域文化の間の二重関係の中で、戦国楚・秦・漢の占卜文化の局面を具体的に検証する。

２．研究の進捗状況

（１）「日書」は巫風豊かな戦国楚国の地に発生し、秦がこの楚を征服すると、秦は楚文化の一つとしての「日書」の占卜文化を受け継いだ。その結果、秦楚の占卜文化の交流による「日書」の第二段を迎え、さらに秦漢統一帝国の成立によって「日書」の占卜文化が全国的に拡大していったことを、「日書」の出土分布状況やそれぞれの占辞の比較から検証することができた。しかし前漢後期あたりから「日書」の統一性が崩れ、占法単位に日者が分岐して行く状況も推測することができた。

（２）秦の六国統一にともない、多くの先秦の地域文化は秦の一連の統一政策の下で消えていった。しかし秦の統一以前における諸国固有の地域文化、とくに文字資料から検証される地域文化の一端は、この３０年来ようやく具体的に知られるようになっている。それが種々の秦簡であり、あるいは楚簡である。とくに秦に征服される以前の楚の「日書」である九店楚簡と秦の各種「日書」を比較し、さらに特徴ある楚文化の一つの「卜筮祭祷簡」と比較することにより、「日書」発生のプロセスの一端を検証することができた。総じて、前漢帝国における楚文化の影響はつとに指摘されたことであるが、秦によって滅ぼされた先秦文化の中でも、とくに生き延びた楚文化の一端を、「日書」から検証することができた。

（３）秦楚の文化交流の中で第二段階を迎えた「日書」文化が、その後の「日書」の基本的な枠組みを生み出したこと、またそれが漢代においてどのように継承されているかを、前漢初期（景帝期）の孔家坡漢簡「日書」との比較において検証することができた。

「日書」の占卜文化の広がりは、ややもすれば特殊に見られがちだった楚文化のもつ一種の普遍性を証明することになり、それが全中国に拡大するのは、秦漢帝国という支配体制を媒介することで可能だったことを検証することができた。

３．現在までの達成度

②「おおむね順調に進展している」

理由：以上の検討は戦国楚の「日書」、それに先行する楚簡「卜筮祭祷簡」、および漢代の「日書」や漢律を総合的に検討することで、ほぼ全体の見通しをつけることができた。その成果は平成 23 年度中に書籍として刊行する。

４．今後の研究の推進方策

古代中国の占卜習俗に関する新しい資料として「質日」が挙げられる。これは当初「暦書」とみられたが、余白にこれを所持した官吏のメモがあり、日記でもある。この種の資料とともに出土する占卜書との関連を今後の研究として繋げて行きたい。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 工藤元男「長江文明と黄河文明―中国文明と地域文化―」（並木頼壽・杉山文彦編著『中国の歴史を知るための 60 章』所収、査読無、pp. 14-18、明石書店、2011 年 1 月）

②工藤元男「フィールド歴史学と中国古代史」（工藤元男・李成市編『アジア学のすすめ』第 3 巻アジア歴史・思想論、査読無、pp. 2-22、弘文堂、2010 年 6 月）

③工藤元男「秦漢田律考－以与習俗的関聯為主－」（中国社会科学院歴史研究所・日本東方学会・大東文化大学編『中日学者中国古代史論壇文集』所収、査読無、p. 135-152、中国社会科学出版社、2010 年 4 月）